

第1講 評論文

問

次の文章を読んで、後の問い(問1～問4)に答えよ。

〔45点〕

1 われわれは平生、「時がたつ」その仕方について、どのようなイメージをもっているであろうか。われわれのA 日常の経験では、ひとを待つときの時間は長く感じられ、何かに夢中になっているときの時間は短く感じられる。時間の流れ方は、状況によって異なるかに見える。しかし、幼児ならともかく、多くの成人は、そうした時間の流れ方の違いはいわば、主観的な感じ方の違いであって、本当のB 客観的時間は、主観のそのときどきの状況とは関わりなく、刻々均一に経過しつつあり、その均一さは、時代や場所の違いを超えた、絶対的なものだ、と考えていることであろう。事実、私が何かに夢中になって、時間を短く感じているその間に、「標準時」に合わせた時計が刻々と時を刻み、それを他の人が見て(ア)タイクツするということもありうるであろう。それに、どんな自然科学者や歴史学者も、仮に時代の違いによる地球の回転速度の変化について語ることがあるにしても、時間の経過それ自体が時代によってその速さを変えらるという言い方はしらないと思われる。われわれのB 常識的な捉え方からすれば、時間はやはり、天上か地上かの違いには無関係に、永遠の昔から現在に至るまで全く同一の速さで流れ来り、永遠の未来に向かって流れつづけていく全宇宙的な普遍の流れなのである。

2 15 10 5
しかも、そうした時間の流れが不可逆なものだということも、われわれの常識に属することであろう。つまり、時間の流れには、現在の瞬間が過去に消失し、さつきまで未来であった瞬間が現在になるという一定の方向があり、その方向を逆転して、過去を現在にたぐり寄せるようなことは絶対にできない、とわれわれは考えているのである。その意味では、ニュートンが言ったように、^{*1} 常識的時間の各部分の順序も不変でなければならない。そして、実を言えば、この不可逆性に(イ)トウメンして初めて、われわれは時間の存在を痛切に意識し、そして時には、C 時間の問題を人間論の最も重要な一章につけ

20

加えることにもなるのである。というのも、一切が同時的に存在する無限な空間にあつては、その部分が相互に交換可能であるのに対比すると、時間の存在理由はおそらくその不可逆性という点にこそあることにならうし、一方、人生の重大事も多くは（取り返しつかないことがら）に成り立つのであり、したがってそれらは同時に時間的な問題でもあるからである。ハイデガー^{*2}においても、「死」は必ずしも生理学的死亡を意味するものではなく、あくまでも実存の存在可能性としての「終末」であつたが、それにしても、もしその終末が可逆的なもので、いつでも元に戻しうるものだとしたら、ハイデガーにおいても、あれほど死が問題になることはなかつたであろう。ハイデガーが死を「現存在が絶対^{*3}に不可能になることの可能性」として、それを「最も極限的な可能性」と呼ぶとき、彼も時間の不可逆性を（ウ）アンモク³のうちに前提していたのである。

25

3

したがつてまた、時間は、さまざまな事物の運動や（エ）セイセイ・消滅など、一般に変化と呼ばれるものの原理でなければならない。もちろん、時間があるから変化があるのか、それとも変化があるから時間があるのかと尋ねられたとき、誰もが即答を用意しているわけではないであろう。例えば、ベルクソンには、次のような言葉がある。「時間とは、あらゆるものが（オ）イツキヨ⁴に与えられてしまうことを妨げるものである。時間は遅らせるもの、あるいはむしろ遅れである（『思考と動くもの』）。これは、時間に積極的な働きを認めた言葉のようにも受け取れるが、実は、あらゆる変化には時の経過が必要であるということをただそのように言いかえたと見ることもできる。もちろん、時間は物ではないから、時間が物のような形で他の物に働きかけるといふことはありえないであろう。しかし、われわれは時間を介さずに変化を考へることができないということも、事実である。変化とは、或る物について、或ることがなくなつて別のことが現れたり、その物自身が消滅して、そこに別の物が現れることであるが、なくなつた事物に関してわれわれは過去の時を語り、現れようとしている事物に關して未来の時を語るからである。そして、一見完全に静止しつづけるものでさえ、時間の一種の侵蝕作用によつて、しだいに古びていかざるをえず、よく言われるように、^Dこの世のすべては「無常」である。

30

ということとは、われわれにとつても、時間はあらゆる事物の継起を支配する絶対的な器だということ

40

35

にほかならないであろう。

(滝浦静雄『時間―その哲学的考察―』による)

※1 ニュートン―一六四二―一七二七。イギリスの物理学者。万有引力の法則を発見した。

※2 ハイデガー―一八八九―一九七六。ドイツの哲学者。主著『存在と時間』。

※3 現存在―ハイデガーにおいては人間のこと。その主体的自覚的なありようを実存という。

※4 ベルクソン―一八五九―一九四一。フランスの哲学者。主著『物質と記憶』『創造的進化』。

問1

傍線部(ア)～(オ)のカタカナを漢字に直せ。

(各3点)

(ア) タイクツ

(イ) トウメン

(ウ) アンモク

(エ) セイセイ

(オ) イツキョ

問2

第1段落では「時間」について二つの方面からの捉え方が示されている。次にあげる〔a〕〔b〕〔c〕は、傍線部A「日常の経験」、傍線部B「常識的な捉え方」のどちらの時間の捉え方か。それぞれ答えなさい。

(各5点)

- 〔a〕 主観的 b 客観的 c 絶対的

a

b

c

問4

傍線部D「この世のすべては『無常』である」とあるが、どういふことか。最も適當なもの、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

(5点)

- ① 時間は一般に変化と呼ばれるものの原理であり、一種の侵蝕作用があるから、万物はすべて永遠の生命を保つことができず、やがては滅んでいき、また新たな生命として蘇^{よみがえ}ってくるものである。
- ② 時間は、変化ということを考えるとき抜きにして語れぬ問題であり、すべての事物の繼起をも支配する根本原理であるから、恒久不変の存在などというものは、この地上にはありえないものである。
- ③ 時間はさまざまなる事物の運動や変化と呼ばれるものの原理であるとともに、われわれに逆に運動や変化を考えさせるものであるから、人間は必然的に時間の力に束縛されたはかない存在なのである。
- ④ 時間は変化と呼ばれるものの原理であり、万物の盛衰の根源を形成するものであるから、人間もその枠の中からのがれることはできず、いつかは変化を余儀なくされ、滅んでいく存在なのである。
- ⑤ 万物の生と死を考えると、時間の問題を抜きにしては語れず、しかも一種の侵蝕作用によってすべてが変化し消滅していくので、人間は時間の流れの前では、傍観している以外に方法はないのである。

